恐怖！富士山T.T

（本社出発点）

2年　斎藤篤志

――プロローグ

夏休みが終ってしまい、残暑が厳しいある昼下り、部員諸氏がうだつの上がらぬ顔を並べている部室での、我々2年生の会話…

三浦「試験が終ったら、何処かへ行こうぜ」

石取「うん、いいね」（いつになく乗り気）

亀山「俺も何処かへ行こうと思っていたんだ、丁度いいや一緒に行こうぜ」（人が変ったみたい）

酒井「……」

私「……」

以上のような会話が展開された後、結局、2年全員で、三国峠、及び草津峠へと赴くことに決定した訳である。

無事に（？）試験も終り、あと半年近くは寝て暮せるという、精神、情緒、共に非常に安定な時期をむかえて、私は不覚にも流行性感冒にかかってしまった。これは、ひとえに連続的に近い徹夜という体力的消耗、及び、久しぶりに頭

酷使したという頭脳的(?)消耗に起因するものと思われ
る。ともかく、こうした事情により、私は、初の2年全員によ
るツーリング参加することを、断念せざるを得なかった。つま
り、オッコチするはめになってしまった訳である。出発当日の
午ごろ、三浦から電話があり、重い頭をかかえて出てみると、
品川駅にいるとのこと、他の3人とおり、全員、体調充分。お
そらく私の様子伺いの電話だったと思われたが、これから来
ないかという冗談(本気だったのかも知れぬ)。行きたいの
はやまやまだけど、体がまうことを聞いてくれない。頑張っ
てこいよ。じゃあ、また。バイバイ」の言葉で受話器を置
いた。漠としたむなしさだけが、何処か残った、…

＊ 上記の文章中に、漢字の間違いがあります。一体、何個、
或いは、何個所あるでしょう。ただし、たとえ正解であっ
ても賞品等は一切出ませんので御承認下さい
(3点)

いよいよ、当日がやって来た。10月半ばだというのに、朝
冷え込みがやけに激しかったのを不思議と覚えている。風邪
はだいたい治っていたので、体調も決して悪いとは言えなかっ
た。ただ、夏合宿以来1度も愛車に手を触れず、整備不良によ
る事故の懸念と、慢性運動不足(同じく夏合宿以来、運動

らしい運動は何もやっていない）による体力的不安は、どうしてもぬぐいさることはできなかったが…

出走順位など覚えている訳はないが、確か私の前は三浦で、後が村瀬（違うかも知れん）だったと思う。「三浦はどうせスッとばしていくだろうから、もう五合目でしか会えないな」と考えたことは思い出される。しかし、その時に私の後に出走した人達に、五合目以前で会えるとは、全く考えの及ぶ所ではなかった。

出走してすぐに、異様にペダルが重いことに気付いた。これはギヤ比の問題ではなく、足が軽快に動かないというか、とにかく、いつもの調子でないことはわかった。仕方がないので軽いギヤに入れて、何とか急場しのぐことにした。一合目を過ぎた頃から、体にけだるさをおぼえ始めた。（去年は、このあたりから、一定のペースをつかめたのに）足は一層重くなり、自分のものとも思えないくらい動きがとれない。そのくせ、体に蓄積してゆく疲労からくる筋痛は、容赦なしに私の神経を刺激する。この間、何人もが私の背後から軽快な回転音をたて、まるで罪人を見るような冷酷なまなざしで（しかし、決して口元には微笑みを忘れずに）《そうですよね、吉本さん》と言い去ってゆくのを、まるで傍観者の如く、私は見ていたのだと、今振り返ってみて、思う。二合目を過ぎたあたり

からだろうか、ふと、不気味な考えが私の脳裏をかすめた。体力的限界を体で感じたからだろうか、急激な体力の消耗による精神錯乱か。『棄権』の2文字が私のパープッ頭の中に現われ、徐々にその域を広めてゆくのがわかった。その時、丁度、小島さんのセレステが私の横に来た。助手席から上原さんが何言か言っているようだったが、私はまるで無声映画を見ているような錯覚で、その光景を眺めていた。その時である、衝動的に、或いは、本能の赴くままに、私の口をついてある言葉が出ていった。

「棄権するかも知れませんから、その時はよろしく」

休憩室

＊相当パープッていたので

『き、きき、けん…するか、もしかも、しれ、ま、せん

から、あ、あ…ハア、ハア…そ、そのとき、は、ア、ア

よ、ろ、し、く、ウウ…』

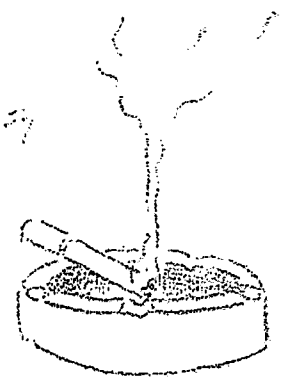
＊ラリッテいる場合

『リ、レンルル、ルル…ラモレリラ

レンララ、ララララ…、ロロ…

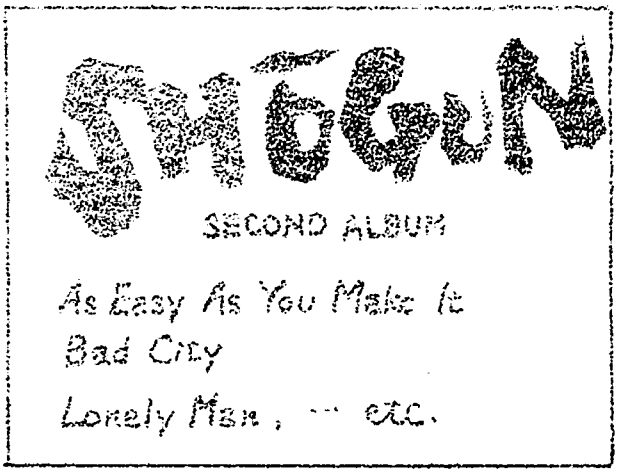
リラ、ロロ…リ、ル…』

〈角井康隆調〉



その後、私の心中に、ただならぬ葛藤が現われたことは、賢明な読者諸君（except M.M）にとっては、想像に難くないだろう。ここから、私は精神的及び肉体的という二重の苦しみを背負いながら、ひたすら（hulu しかたなしに）ペダルをふんでいた。そして、つついに、私が非常に恐れていたことが現実化してしまったのである。即ち、足、それも、大腿部の背後が吊ってしまったのだ！今までに、足が吊った経験は勿論あるが、それらは、足の裏とか、ふくらはぎとか、主に足の下部で、その治し方も心得ているので、安心して（変な言い方だけど）吊ることができる。ところが、今回は、不運にも未経験の場所が吊ってしまったので、どうしたらいいか、わからなかった。《一般に、未経験というのは、最初、何をすればいいのか、わからないものである。そうでしょう、鈴木直さん》

想像してくれたまえ、チャリンコに乗っていて、しかも常にペダルをふんでいなければならない状態（坂なので、こがない



と止ってしまう。したがって、ころんでしまう）で、大腿部に突然、激痛が走った。確か左足の方だったと思うが、御存知の通り、普通停止する時は左足から着地する（例にもれず私も）ので、このまま左足で着地すると、ころんでドブにはまってしまうのではないかという懸念と、右足で着地すると、もしや車が来て足をひかれてしまうのではないか、そして、…という恐怖が私を襲い、一瞬にして私は判断を下し、見事ころばずに停止できたのである。（結局、どちらの足で着地したのか定かでない）しかし、ここで決して安心できず、その後、チャリンコを路肩に放り出し、ころがるようにして、もんとそ必死で横たわった。吊った足をどうしたらいいものか、わからなかったので、夢中で脛部をマッサージした。それからどのくらい時間が経過したのだろうか、あの不快な足のつっぱった感覚と激痛は失せたが、鈍痛は依然残った。そろそろ出発しようかなと思い、立ちあがろうとして足をのばした時「ピーッ」（必ずしもこの擬態語は適切ではないが）という感じで再び激痛が大腿部に走った。そこで先と同様な処置を仕方なくやった。この間、車やオートバイが頻繁に通過したと思われるが、全く冷酷にもたった1台さえも止ってくれなかった。私も甘ったれてそれを望んでいる訳ではないが、せめて1台ぐらい止って、様子でもみてくれればいいのに。そうすりゃ、少

しは元気も出るってもんだぜ。それくらいしてくれても**ええやないけ！**（浦島さんのように）まあそれはともかく、こうなってしまっては、もはやチャリンコにも乗れず、まさか夏合宿の時の三井じゃあるまいし、チャリンコと一緒に歩いて帰るわけにもいかないので、

もう、どうでもいい、とうでもいい、やめやめ。

（顔の前あたりに右手を出して、指を少々曲げぎみにし、手首だけ左右に曲げて、三浦はよく、この言葉を発する）と完全に**戦意喪失**してしまった。

そこへ例の三井がひょっこり現われた。奴も足が吊ったとかで、私の目の前でおりて、足をマッサージしながら、あのいつもの格好でうしていたが、再び、力尽きたかのごとく出発した。さすが、三井は足の吊り、チャリンコの押し方には慣れているとつまらぬ感心はしたが、私も一緒に行こうなどという気には、浮んで来なかった。

その後、私は寒さと足の痛みに耐えながら、救援が来るのを、それこそ首を長くして待っていたのである。漠としたむなしさと共に…

休憩室 2

ある若い男2人が、いやらしい目つきで、1人の可愛らしい女性を見つめて、ささやいている。

A「きっと彼女は処女じゃないぜ」

B「いや、いや、顔にたあわず、もうすんでいるよ」

A「よし、それじゃ、賭けよう。俺は、"まだ"に一万円！」

B「じゃ、"もう"に一万だ！」

…それから、一週間後、2人は再会した。2人は、互いに一万円札を差し出して、言った。

A「おまえの言う通り、"もう"すんでたよ」

B「いや、"まだ"だったよ」

エピローグ

（阿成の突然、下章は口調になる。意味深長ですね！）

その後、私がどうなったかは、皆さん御存知のことと思いますので、ここでは割愛させていただきます。また、その後数日間の部室における私の乱場という点につきましても割愛させていただきます。（書くと、腹が立って、この原稿をやぶり捨てたい衝動にかられそうだ、ク～）

このT・Tにおいて、私はいろいろなことを悟りました。実にいろ

いろなことを…　ある意味では、よい人生経験であったと言ってもよいでしょう。

来年（というかもう今年だけど）のT.Tには出たいと思います。たぶん出るんじゃないかなあ…出ようと思っているけど……総員やりたいなあ……まあ、ちょっと覚悟はしておこう。とにかく、出場するとなれば、まず第一に風邪をひかないで、少なくとも1週間、いや、1ケ月前くらいから、トレーニングなどやらねばならないでしょうね。余談ですけど、石飯くんと亀山くんは、T.Tの前の日曜日に、奥多摩有料道路へ行ったんですって！一緒じゃなかったっていう話だけど、頑張っているわねえ。本当にすごいわ。他の人達もそうなのかしら？そうしたら、私も○○くんと頑張りたいわ（上原さんの口調でどうぞ）《ただし、私は、ワヨシではなく、ワタクシと読んで下さい》

では、最後に、わざわざむかえに来て下さったセレステの小島さん、下山の際、パルサーに乗せていただいた古木さん、及び、いろいろ御迷惑をかけた部員の皆さんに、紙上ではありますが、感謝の意を表したいと思います。（これは、決して冗談ではありません）

―― モノローグ

庄司薫は、21歳の春、東大教養学部にいたとき、『喪失』という小説を書いた。
そうすぐ、同じ年をむかえる自分は、一体何をすればよいのだろうか。今は、あせりに近い心境だ……

……自己否定衝動の客体化……